



伝統技術で上棟

新たな門出の節目を迎えて

磐田市の連城寺様（曹洞宗・馬場住職）にて、このたび四脚門新築の落慶式が厳かに執り行われました。これまで山門のなかった連城寺様では、先代ご住職の代から「いつか山門を建立したい。」という長年の願いが受け継がれてきました。その思いが実を結び、このたび風格ある四脚門が完成。ご住職をはじめ総代の皆様にも大変お喜びいただき、笑顔あふれる落慶式となりました。

山門は「お寺の顔」ともいわれ、伽藍全体の印象を大きく左右する存在です。新たな四脚門が建立されたことで、連城寺様の風格が一層高まり、訪れる方々を温かく迎え入れる象徴となりました。

これからも山門が地域の皆様を迎え、寺院と人々をつなぐ大切な存在として、日々の営みを静かに見守りながら、末永く親しまれることを願っております。連城寺様、このたびは誠に落慶おめでとうございました。

百年の時を経て、

次代へつなぐ保存修理

三嶋大社様の社殿鬼板において、修理前の詳細調査を進めました。銅板を丁寧に取り外し、内部の状態を確認すると、当初の設計時に想定していた補修内容とは異なる損傷が見つかることも少なくありません。外からでは分からない傷みも、解体して初めて明らかになります。そのため、修繕が必要な部材の木拾いや修理方法を改めて検討・協議しながら、一つひとつ慎重に作業を進めています。前回の保存修理から約百年。長い年月を経た文化財だからこそ、損傷の状態を正確に見極め、健全な部分ではできる限り活かしながら修繕することが大切です。

また、解体や調査を進める中では、前回の修理の痕跡や当時の職人の仕事が見えてくることもあります。そこには、百年前の職人たちの工夫も残されています。残された部材や仕事の一つひとつから先人の技術を読み取り、受け継ぐべきものを見極めながら、天峰の職人の手で次の時代へとつないでいきます。

次の保存修理まで、先人から託された技術と想いを未来へつなぐため、丁寧に保存修理に取り組んでいます。

